宝珠山立石寺

1千段以上の階段を上ると、山の中にある複数の御堂の集合体で、山寺として知られる立石寺の最上部に到着します。山形県の神聖な宝珠山の森の傾斜部に建立されており、ここまでの往復路はサムサラ（永遠の再生；輪廻）の追体験となります。寺の境内正門に位置する山門で、訪れた人々は徐々に「来世」に入ります。山を登りながら、参拝者は清められていきます。上で瞑想と祈願を終えると、参拝者は下山を始め、仏陀の教えと共に新たに生まれます。

慈覚大師円仁（794～864年）は、天皇の命により仏教を広めるため、北部日本の辺境を旅しながら、860年に立石寺を創建しました。立石寺は、京都と滋賀にまたがる比叡山の天台宗総本山、延暦寺の分院です。慈覚大師円仁は、中国から日本へ伝来した天台宗の第3代天台座主でした。

宝珠山麓

立石寺への入り口は、山寺駅から店舗や食事処を数軒通り過ぎて少し歩いたところにあります。山寺の総本堂である根本中堂は、訪れた際に最初に到着する建物です。ここには医薬の仏である薬師如来立像が安置されており、慈覚大師円仁が自らこれを彫ったとされています。根本中堂には、慈覚大師円仁が延暦寺から持ってきた法灯もあります。数世紀にわたり、いずれかの寺の炎が消えると、もう一方の寺の炎で再び灯されてきました。このようにして、不滅の法灯は1,200年以上にわたって燃え続けています。

根本中堂を過ぎると、俳諧師・松尾芭蕉（1644～1694年）の像と、芭蕉の有名な蝉の俳句が彫られた俳句碑があります。芭蕉は、立石寺の荘厳な閑さに触発され、山寺を訪れた際に蝉の俳句を詠みました。蝉の俳句は、有名な俳諧『おくのほそ道』に含まれています。この有名な作品は、江戸（現在の東京）から東北地方までをほとんど徒歩で旅した芭蕉の紀行です。芭蕉の蝉の俳句のもう1つの記念碑であるせみ塚は、山のさらに奥にあります。

山を登り、サムサラを通る旅路は、宝物殿、念仏堂、日枝神社を通った後の山門から始まります。

宝珠山を登る

提灯が並ぶ道を進み、各種像やそびえ立つ木々を過ぎた先にある姥堂は、そこから上の極楽とそこから下の地獄の境にある象徴的な門です。姥堂には、生前の世界と死後の世界を隔てる三途の川の河原で死人の服をはぎ取る怖い老婆・奪衣婆の色鮮やかな像が納められています。姥堂ではかつて、参拝者たちが心身を清め、奪衣婆に自らの着物を奉納し、登山を続ける前に新しい着物に着替えていました。これは、参拝者の世俗的欲望や汚れを流すという象徴的な習慣でした。

さらに登ると、せみ塚の石碑の近くに弥陀洞と呼ばれる風雨に削られた岩壁があります。時がたつにつれ、この岩は自然に削られていき、阿弥陀如来を彷彿させる岩と化しました。阿弥陀如来の姿に見える人には、ご利益があると言われていいます。

仁王門は、山の間地点を示しています。金剛力士像が建物の両脇に建ち、悪いものが入らないようにしています。その先には、性相院、金乗院、中性院、華蔵院という4つの寺があります。

転生

立石寺の上流部はこれら4つの寺院を過ぎた場所にあり、極楽を表しています。ここでは、教えの実践者が転生に備えて仏教の教えについて瞑想します。この遊歩道は分岐していて、うち1つは、最も奥にある奥の院（納経堂と大仏殿）につながっています。納経堂には歴史的な仏である釈迦牟尼と、豊富な宝の仏である多宝如来の像が祀られています。これらの像は、僧侶円仁が中国で仏教を学んだ後に、中国から持ち帰ったと言われています。隣の大仏殿の中には高さ4.8メートルの金仏像、阿弥陀如来像が納められています。

もう一方の遊歩道は、慈覚大師円仁を祀る開山堂につながっています。その中には、創建者の木造の像が安置されており、僧侶が、朝晩、食べ物を供えています。断崖絶壁に露出している赤い小さな建物が、納経堂です。納経堂は、修行中の僧侶が書き写した経典を納めるための場所です。狭い階段は、開山堂の上の絶壁に建てられた五大堂に続いています。五大堂からは、立石寺と眼下の溪谷を、何にも遮られずに眺めることができます。